

2017年9月26日（火）19時～21時@ヒカリエ8F COURT

都市想像会議

## 第10回「家をひらく×都市」

都市で家をひらくとは？

登壇者：



坂倉杏介（東京都市大学都市生活学部 准教授／三田の家LLP代表）

ファシリテーター：



左京泰明（シブヤ大学学長）



紫牟田伸子（編集者/プロジェクトエディター/デザインプロデューサー）

**紫牟田：**今回で都市想像会議は10回目です。今日のテーマは「家をひらく」です。東京都市大学都市生活学部の准教授でいらっしゃる坂倉先生をお招きして、「家をひらく」ということは一体、何なのだろうか。そこにはどんな意味があるのか。どうしたらいいのか。具体的にどんな運営しているのか、どんなやり方があるかを含めて考えていけたらいいなと思っています。

今日、この会議に集まってくださった方々の中には具体的に家を開こうと思っている方もいらっしゃると思いますので、配布資料の中に入っている付箋に知りたいこと、疑問などを書いていただいてスタッフにお渡しください。坂倉先生のお話の後にいただいた質問を含めて会議を膨らませていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。



会議の様子

『住み開き：家から始まるコミュニティ』（アサダワタル著／筑摩書房）という本が2012年に出版されましたが、家を開くことでプライベートからパブリックへの広がりやを問うような試みが広がっている昨今ではないでしょうか。

最近、大阪の友人が作業場として使われていた建物をリノベーションして、二階を自宅に一階を事務所にしたというので、オープニングパーティに行ったところ、友人はここを「川口お旅所」と名付けまして、来た人たちに「ここをどんな風に使いたいですか？」と尋ねていたんですよ。「御旅所」というのは神様が一休みする場所で、その友人の自宅のあたりには天満宮の御旅所があったのだそうです。友人は自宅兼事務所であるこの場所が、ここに来る人にとっての地域への入り口になったらいいなと考えているんですね。

東京では、世田谷区にある「岡さんの家」がよく知られていますよね。もともと個人のお宅ですが、世田谷区が「地域共生の家」にしました。世田谷には「一般財団法人世田谷まちづくりトラスト」（<http://www.setagayatm.or.jp>）が管理する地域共生の家はいくつもあります。

このように、家を地域との関係の中で考える人たちが増えてきている。これは住宅と地域、ひいて都市との関係の話ですし、住むことと地域の間を問う動きだと思います。

こうした事例が増えている背景になにがあるのか、そこにはどのようなかたちがあるのか、具体的にどうやって開いているのか、それをどう続けているのかという4つの問いを設定して、坂倉先生とともに考えていきたいと思っています。

それでは、まず坂倉さんに、ご自身が展開されている活動のお話をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

## つながりのプラットフォーム

**坂倉：**みなさん、こんばんは。坂倉杏介と申します。自己紹介代わりに、普段こんなことをやっていますということをお話ししたいと思います。必ずしも「家をひらく」専門家ではないのですが、いろいろな家のひらき方をやってきたので、そういうところから、「家をひらく」とはどういうことなのかということに広げて行きたいと思います。

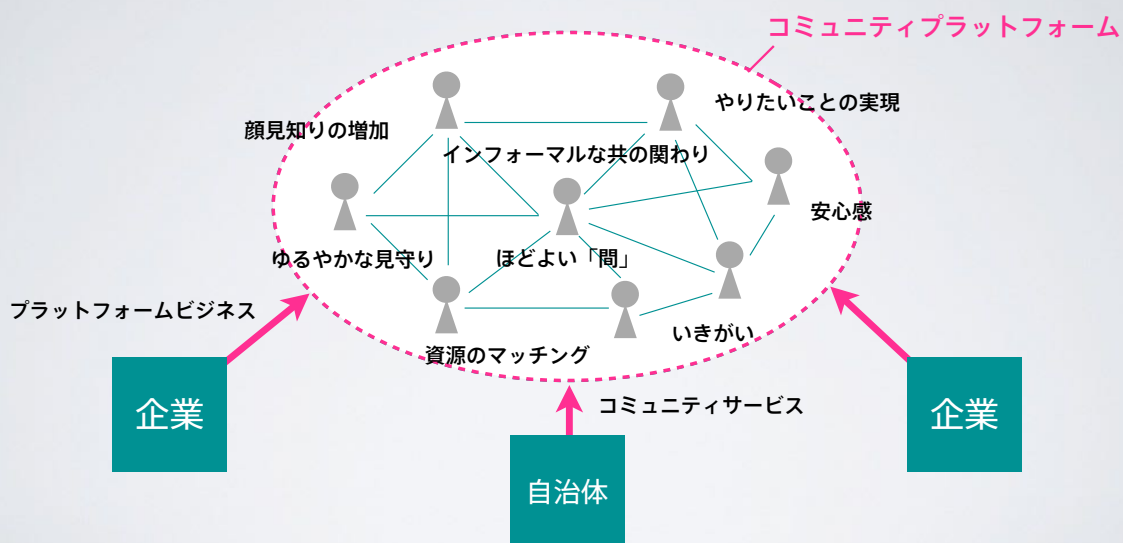
代表的な仕事としては、「芝の家」(<http://www.shibanoie.net>)や「三田の家」(<http://legacy.mitanoie.net>)などがありまして、港区の活動が多いのですが、都市大に移る前に10年間慶應義塾大学にいて、港区役所と一緒にコミュニティづくりをやっていたという経緯があるからです。

私が専門にしているのはコミュニティマネジメントで、平たく言えば、「人と人とのこと繋がりをつくさん社会にたくさんつくって、結果みんな楽しく安心して暮らせる社会をつくっていく方法」を考えることです。よく言われることですが、社会が便利になれば、繋がりがどんどんなくなっていくのは当たり前で、現在はお金があって健康であれば誰にも世話にならなくても生きていけます

### コミュニティマネジメント

つながりをつくることによる全体的生活価値の向上

ほどよい関係性を構築できる環境を提供することで、  
新たな生活価値を提供するビジネスモデル＝「コミュニティの経営学」の必要性



研究テーマ：社会的創発の生まれるプロセスの解明と関係づくりの方法論の開発

SAKAKURA kyosuke | Keio University

よね。昔は食べ物をつくるにしても、協力してつくらなければならなかった。生きていくために関わることをせざるをえなかった。今の時代はそういうことがなくなってきていて10年20年、下手したら50年もの間、人と関わらない、人の世話にならないで生きていくケースがでてきています。それが、漠然とした不安や何かあったときに決定的にまずいことを引き起こしてしまう。例えばDVの問題があると、家の中の人たちだけでは安全が保てない。これまでのようにひとりひとりのニーズに合わせたものを提供していくことだけではなく、いろんな人がほどよく関わる環境を用意することで安心感を感じたり、やりたいことを挑戦しやすい環境が必要になってきているように思えます。

私の研究テーマはそういう場所をどのようにつくっていくかです。人の繋がりというのはボールペン



をつくるようにはつくれない。知らない人たちにいきなり「仲良くしてあげてください、親友になってください」と言ってもできないからです。親友になることは自分が決めることであり、仲良くなろうと思うのは自発性の問題であるので、繋がりというものは誰かが一方的につくれるものではない。だから、非常に難しい。けれど、それを偶然に委ねていいのだろうか。いろんな人が安心して一緒にいられて自分が思うこと話せて、お互いのことを認め合うことができる場所（プラットフォーム）をどんど

んつくっていかないと、知らない人関わってみようとはなかなか思わない。こういう空間が今社会に必要なのではないかと考えています。わたしの研究テーマはそれをどうやってつくっていくのかということと、人間がそういうところに行くとどう変化していくのかを研究しています。

## 地域資源と活動を両輪にする

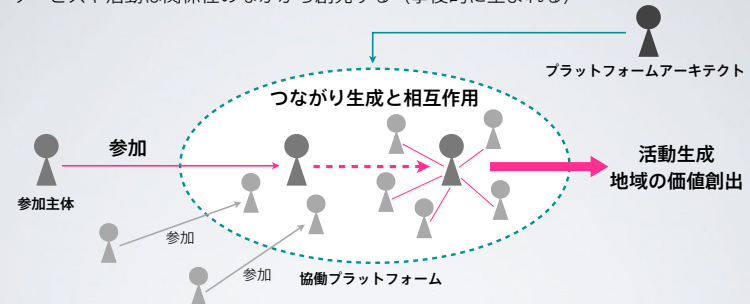
「芝の家」は、近所の人たち、赤ちゃんからお年寄りまでいろんな人が来てお茶飲んだり、遊んだりする場所で、今年で9年目になります。先程お話があった世田谷区では、行政の支援を得た「地域共生のいえ」というかたちでやっていますが、「芝の家」は港区の事業として行政が主体として行なっている、全国的に稀有な事例です。我々は事業を受託して運営しています。



芝の家 写真提供：坂倉杏介

### 協働プラットフォーム：人と人のつながりが新しい価値を生み出す基盤

工場とは違い、できるものはあらかじめ決まっていない。人々が協働する場（プラットフォーム）に、まず人や資源が集まりはじめる。サービスや活動は関係性のなかから創発する（事後的に生まれる）



- ▶ 社会的創発の場がつながりと活動を生む：まず多様な人が集まり、お互いに関わりあうことを通じて、結果的にそれまでになかった新しい活動や価値が生まれる。
- ▶ こうした創発の起こる場をどのように設計することができるか？



「芝の家」には毎日40人ぐらいの人が来ます。週5日イベントがある場合もあるけど、ただ単に開いているだけということもある。何してもいいし、しなくてもいいぐらいのところに毎日40人来るといえるのはなかなかありません。それだけ「芝の家」に来ることが生活サイクルの一環になっているんです。八百屋さんの帰りに寄ったり、用事がないから行ったり。特に用事がないけれど顔は出す、という人たちが一定程度いるので絶えず誰かが通りかかって滞留しているし、必ずほぼ毎日初めて来る人がいる。そういう地域のいろんな人が交わる場所になっています。

他にも港区と一緒にやっている事業がいくつかあって、そのひとつが「ご近所イノベーション学校」(<https://gokinjo-i.jp>)です。場をつくるということと活動したいという人を後押しするというのは本来別々の事業なんですけど、両方を一体的に運用して、まちづくり講座みたいなものを単に講座として終わらせるのではなく、ここでやりたいと思ったら、すぐに「芝の家」でできるように、場所と活動をセットにつくっていきたいと考えています。

これは結構大事で、活動だけの支援だとどうしても続かなかったり、場所だけの支援だとメンバーが固定されて活動が停滞したりする。両方セットでやっていくことは確かに大事な思います。

また、世田谷区でも同様に、場所と活動をセットでコミュニティをつくっていくことを重視しています。先ほどの「地域共生のいえ」のほかに、「世田谷トラストまちづくり大学」というまちづくりに参加したい人の活動を後押しする講座があります。この講座の場合は必ずフィールドを用意しています。

私が2014年に「『古い木造アパート再生』多世代交流の場づくり講座」という講座をしたときに会場になったのは、世田谷区大蔵にある「タガヤセ大蔵」という地域に開かれたデイサービスの施設でした。これは、賃貸にもできないということで1階スペースをすべて壊してお年寄りのデイサービスにしているんですね。驚愕したのは、木曜日の10～16時という時間帯で連続6回という講座にもかかわらず、定員オーバーで35人も集まったんです。いまでもそこで出会った人たちはいろんな活動をされています。

世田谷区はそういった拠点とコミュニティを大事にしているなと思います。「地域共生のいえ」も自分の持ち家をひらくアシストをしましょうというもので、区が200万～400万円の改修費に出し、できた後のネットワークや拠点にサポーターが集まるように講座で支援をしてくれる。「世田谷らしい空き家等の地域貢献活用助成事業」はその発展版で、保坂展人区長の肝入りで始まったものです。これは、大家さんとそこで活動したい地域団体をマッチングするものです。私はその審査委員長を仰せつけられて、先日も1件決まりました。そこは建築家と編集者のご夫婦が深沢に古い家を借り受けて、1階に子どもの子育て広場と食堂を入れて、2階に旦那さんの事務所を入れるという計画です。

大学のゼミでやっているコミュニティマネジメントも結構活発に活動をしていて、東急不動産が世田谷の中町につくったシニア住宅のコミュニティサロンの運用方法を学生が提案したり、空間を設計したり、そこにいろんな人が集まってこられるようなイベントをやっています。

神奈川県湯河原町では、慶應大学の先生方とやっているプロジェクトなんですけど、一軒家を借りて、「放課後リノベーション」と呼んでいるのですが、子どもたちと一緒にリノベーションをしていますね。学校帰りの子どもたちが大工のお兄さんが工事をしているのを手伝わせてもらって、大学生がそれをサポートするというかたちで、いろんな他世代の人たちと居場所づくりをやっています。

## ひらいただけでなにかが始まる

次にこれまでやってきたことを少しご紹介します。

「家をひらく」というと、自分がふさわしいのかな？とは思っていたんですよ。何故かという、最近、いろいろな素敵な家をひらく事例があって、ヒカリエで話すならそういうキラキラした事例のほうがふさわしいんじゃないかなあ、と思ったからなんです（笑）。どちらも世田谷の事例なのでご存知の方も多いと思うんですが、多摩美の堀内正弘先生が、深沢の自宅の離れを耐震改修などして、地域の活動団体や近隣の人たちの場所として解放している素敵な「シェア奥沢」(<http://share-okusawa.jp>)とか、博報堂のクリエイティブディレクターをされている近藤ヒデノリさんという方が、経堂のおじいちゃんが住んでいた土地に環境共生型の家を建てて、イベントスペースを地下につくっ

て、自分たち家族も住むけれどシェアハウスでもあるようにした「KYODO HOUSE」などがあります。ヒカリエでお話しするなら、こういう人を呼んでくるべきじゃないの、と最初は思っていたんですよね（笑）。「シェア奥沢」ができたのは2014年で「KYODO HOUSE」は2015年。私がいわゆる「家をひらく」ということを最初にしたのは結構昔で、15年くらい前なんです。大学院生時代に「京島編集室」というのをやっていました。

「家をひらく」というと、自分を持っている家をひらくということを普通考えるんですけど、「家をひらく」という言葉には、誰も使っていない家を違うかたちでひらくことも含まれるなと思ったので、形態の違うものを3つご紹介したいと思います。

「京島編集室」は、この建物はもう無くなってしまいましたが、墨田区の京島というところにあります。この数年後にスカイツリーができて賑わう押上から北にいったところにある曳舟が最寄駅です。いろんな経緯があつてこのかまた米店がずっと空き家だったんですけど、ここに学生4人で住み込むというプロジェクトをやることになりました。アーティスト・イン・レジデンスが始まった頃で、我々のゼミで「アーティストイン空き家」というプロジェクトをやっていました。京島にはたくさん空き家があつて、高齢化率が高くて、木密と言われる木造密集地で非常に危険度が高い。なので、そこにフランスからアーティストを呼んで、自分の町を見直すきっかけにしてみようということがプロジェクトの一環でした。でも、フランス人が来てわざわざ3ヶ月住むのなら、私たちも住もうかなと

（笑）。そういうノリで住むことになりました。真面目に考えることはたくさんあったんですけど、この空き家のプロジェクトをやったのが私の修士の先生である三宅理一先生で、「京島編集室」のほうは熊倉敬聡先生と一緒にやりました。これは熊倉先生の「美学特殊C」という慶應義塾大学の文学部の講座で始まったプロジェクトで、アトリテラシーをテーマにいろいろな実験的な活動を行なっていたのですが、私たちは「オルタナティブスペース」というテーマで新しい自由な空間づくりを模索していました。例えば、教室というのはなぜみんな同じ方向に向いて先生の話をしきくのか、それ以外の使い方はないのか、などを授業で実験をしていました。なぜ蛍光灯しかないのか、お茶を飲んではいけないのか……そういうのをやってみようという授業でした。そういう活動を授業という枠組みのなかから問い直していくという授業でした。



京島編集室（2点とも） 写真提供：坂倉杏介

京島では、蒲田米店という空き家を2ヶ月間だけ借りて住む予定で、もともとこんな感じでした（写真）。いまはリノベーションが普通になりましたが、当時は全くそういうことがなくて、これをどうキレイにしていくかさっぱりわからないんです。まだ学生だったので、カフェをやるにしてもコーヒーすら上手く入れられない。無力感を感じ、「どうしよう？」と思いました。そこで、発想を転換して「あらかじめ何かを用意するのはやめよう」と、寝袋だけ持って行って10月1日から泊まることにしたんです。そうして住みながら掃除をし改修することにしました。「住むことから初めて起こること」を大切にしようというプロジェクトにしたんです。大学院生でワークショップもできないし、カフェもできないし、リノベーションもできない。だけど、住むということならできると思いました。

住むことを始めるといろんなことが起こりました。区役所の人「あそこの寮からなにか持ってきてもいいよ」って言われてもらってきたり、みんなで掃除して直して、それなりに空間ができてくるん



ですね。1~2週間で住めるようになって、こんな感じになりました（写真）。1階は5坪で、上がり框があつてぐるっと回って階段を登ると四畳半二間があつて、そこに大学生男女4人で寝泊まりしていました。もともと米屋ですから、1階は店です。そこに大学生が暮らすトリビंगルームのように使うことになるのですが、目の前が道路ですから外から丸見えで、そこにテーブルを置いて学生が朝夕ご飯を食べている。そこからコミュニケーションが広がって、駅前のおばちゃんが鍋や炊飯器を貸してくれたりするんです。下町ってすごいですね。小学生が入ってきて仲良くなったり、地元のひととスペインの人が仲良くなって一緒に鍋を食べたり、そういうことが次々起こってきました。何も意図せずとも結構いろんなことが起きるんだなと感じながら2ヶ月過ごしました。

これが「家をひらく」最初の体験でした。

次は「三田の家」といって、「京島編集室」の頃から何年か経った後の話です。京島は自宅からも慶應大学からも遠かったのもう少し自分たちの生活範囲に近いところでやりたいと思い、三田キャンパスの近くに「三田の家」ができました。こんな感じで本当に家なんですね。リビングルームがあつて台所があつて、そこを教室的に使うと変なことが起きるそういう場所だったんですが、2006年にオープンするまでに3年以上かかりました。最初に商店街の理事長のところへ相談に行ったのが2003年だったのですが、墨田区に比べて港区は賃料が高くて貸してくれる物件がないんです。調べても見つからないから、とにかく移動式の屋台をつくって、路上や公園で集まる場を作ったりしていました。こういうことがあつてやっと借りられました。せっかく借りられたけれど、お金もないし常駐の人ももちろん雇えないので、「日替わりマスター」というかたちで、先生何人かと共同して家を開くというやり方にしました。オープン時間も無理して揃えない。イベントをいちいちやろうとすると続かないので、マスターが居るということ＝オープンであると定義して、ハードルはできるだけ下げて運営するようにしました。面白いのは、大学の外にあるといろんな人が来やすいということです。みなさんも大学や高校の先生に会いに戻るのハードル高くないですか？ 研究室を訪問しようと思うより、先生が大学の外にいて家にいるから行こうかなと思うと俄然ハードルが下がる。大学の外だし、地域の中にあるし……そういう場所であることでいろんな人が通やすくなって、集まりやすくなってきているんです。

階層はみんなでやりましたが、門を格子にして透けて見えるようにしてみたり、ちょっとずつ工夫をしてキレイにしていきました。台所があつたのでご飯を食べるイベントはよくやりました。私の授業をとっていた学生と近所の会社員と米屋のおばさん、普通に考えたら絶対合わないような人たちが



三田の家 写真提供：坂倉杏介



ご飯をつくって一緒に食べる。授業があつて、授業の帰りにまた行く。また、大学には留学生がたくさんいますが、日本人の学生となかなか仲良くなれずに、がっかりして帰る子が多いので、留学生の面倒をみってくれる先生が月曜日を国際交流の日にして留学生や教育・国際交流に興味がある人が集まってすごく賑わっていました。商店街の人たちの活動もちろんあるし、いろんな地域との交流、ワークショップ、展示会などありとあらゆることをやる場所でした。



留学生との交流の様子 写真提供：坂倉杏介

残念ながら、ここは大家さんが亡くなって2013年いっぱいまで活動を終えます。まるまる7年間やって、最後の日は入りきらないくらいの人が集まってくれました。

三田の家は終わりましたが、いろんなところに記憶が残っています。長野県塩尻市の大門商店街の空き家を市役所の職員たちが月1,000円ずつ出し合って借りている「nanoda」(<https://www.shiojiring.jp/空き家プロジェクト-nanoda/>)は、市の職員の山田崇さんが「三田の家」に来て、「こんなことやってもいいんだ」と思ったことが始まりだそうです。「三田の家」が終わるとき、扉代わりにしていた黒板を形見分けでさしあげました。あと「シェア奥沢」でご飯を食べるイベントをやっている人は元々「三田の家」で活動を始めました。そういうふうになんか繋がっていつているのかなと思いますね。



三田の家の最後の日の様子 写真提供：坂倉杏介



最後は、私の家です。「芝3丁目場づくり研究所」という名の地域のコワーキングスペースなんですけど、自分の家です。なぜこんなことを始めたかという、最初は深い思いがあったわけではないんです。実は2013年まで北鎌倉にあるすごい素敵な一軒家に住んでいましたがした。ところが週7で東京に行く生活になってしまったので、鎌倉で生活するのがもったいなくて大学の近くに移ろうと思ったんですけど、ただ、問題は本をすべて持って行こうとすると家賃が高すぎて借りられないということでした。なので、家に入りきらない本棚の分をひらいて他の人と共有できる場にして、自分も家賃払うけれど、他の人にも家賃払ってもらってそうしたら引っ越せるというスキームでやってきたんです。奥に私が住んでいるところがあるのですが、玄関を入ってすぐの場所には家の中に入りきらなかった本棚たちを置いて、そこがみんなが使うコワーキングスペースになっています。



写真提供：坂倉杏介

実は、「芝の家」のすぐ近くなので、スタッフがもちろん作業するということもありますし、間借りをしていたNPOの方が「芝の家」でイベントをするといろいろ起こります。仕事だけではなく、ご飯を食べることもあるし、お子さんも靴を脱いで安心して過ごせるような場所になっています。港区は家賃が高いですから、最低限の住居スペースを個人で負担して、ひらかれた部分を複数の人で共有するというスキームです。でも、単なるシェアオフィスにしても面白くないなと思って、地域に住んでいる人が地域をつくるための仕事を請け負える仕組みにしていきたいと思ったんです。「三田の家」をつくったときにつくった「三田の家LLP」(<http://www.mitanoie.net>)が「芝の家」の仕事を区から受託しているので、「三田の家」として家を借りて、個人だと受けにくい公共的な仕事や企業の仕事を「三田の家」で一旦受けて、「実際近所に住んでいる人がやろう！」というふうにすると自分の住んでいるまちの仕事をちょっとできる。港区に住んでいる人で港区のまちづくりの仕事を手伝える人はたくさんいると思うので、儲けは多くはないけれど自分の地域をつくる仕事としてやっていけるような場所になったらいいなと思って始めました。あまり、いまはまだ活発にはやっていませんがこういうことをやりたいと思っています。



写真提供：坂倉杏介



## 生き生きできる状態をつくる

**左京：**地域コミュニティの交流の拠点になる場を目的とした施設はいくつもあると思うんですが必ずしもほどよい人と人との繋がりが生みだされたり、多様な活動が生まれていたりしてない様子があると思うんですね。「京島編集室」のように、5坪のお家で目の前が道路で地域の人たちが子どもからお年寄りまでいろいろ関わってきてくれるようなところもあれば、そうっていないところもある。紹介していただいた事例はいずれもすごく生き生きとした人の活動が生まれているような感じがするのですが、なぜそれが起こっているのか、それを目的にしているにも関わらず、そういった施設ではなぜそうっていないのか、改めて素朴な疑問を持ちました。その条件、秘密は何なのでしょう？

**坂倉：**最初から難しいですね。結構深い話で、私がなぜこういうことを始めたのかというところにも関わるといいます。

現代の都市空間は、ありのままの自分として生きられて、自分が何の役に立っているのかやどう評価されているかを気にせず存分に居られる場所というのがやはり少ないと思うんです。昔はよく異業種交流会といったものがありました。それは知り合いを増やそうということなのかもしないけれど、そこでは名刺をたくさん交換しなくてはならないとか無理やり新しいことを始めなきゃいけない、そういう暗黙に前提されている約束事があって息苦しいなと思っていて、目的がなかろうが一緒にいられる、そして自分が生き生きと出来る状態というものをできないだろうかということを考えていました。会社員の頃はよく”計画”をつくっていましたが、発想の飛躍がないし、隙間もできないんです。建築でも、まず「施設全体としてはこういう機能があるから、それを分割していくと〇〇のための部屋には何平米必要で……」という流れで施設ができるんですが、果たしてそれだけでいいのか、目的があろうがなかろうが人が創造的に出会える空間、可能性に開かれている場所をどうやってつくればいいのか、をすごく一生懸命考えていました。公民館やコミュニティスペースというものが、そういうことを目的としているのに意外とそうならないということにみんな段々気がついてきたと思うんです。

そもそも昔は、コミュニティセンターと住民組織をセットでつくればうまく機能しました。第一世代の人にはうまく機能したけれど、なかなか代替わりできなくて、結果的に貸しスペースとカルチャーセンターというものになってしまっている。

それだとちょっと厳しいと思った第二世代の、登録して目的を持たないと借りられないようなところではない場所をつくろうという動きが90年代に出てくる。そこでは一定の人が出入りして、自由に関われるようになっていくんですが、それでも地域の本当のニーズが満たされなかった。それで、民間の人たちが……”住み開き”もその一環だと思うんですが、いろんな人と一緒に居られる場所は行政の政策メニュー上になかったので自分たちでつくってしまおう、ということでコミュニティカフェみたいなものが出てきて2000年以降に広がってきた。「芝の家」は、そういうものをもう一度行政がやろうとする実験です。これは、ちょっと新しいモデルなんだと思います。

ポイントは、制度的に管理されていたり、つくった人があらかじめ一定の行動を求めるということがない場所をどうやってつくるのか。そして、それを公共の場としてどうあり続けさせるのかです。知り合いでなければ入れない場所をつくる人はたくさんいますが、「家をひらく」というのは”自分の友達ではないけど、その人が来たら人として歓迎しますよ、いてもいい状況をつくりますよ”という公共空間をつくり出すことです。そこのボタンを掛け違えると、公共施設なんだけど公共空間ではない場所になってしまう。

**左京：**計画通りにしてしまうと無目的にできない。結果、余白、ゆとりのある可能性に開かれた場所になっていかないというお話ですが、行政の場合、そういう場所がいいなと思っても、結局目的を持って計画を立てながら議会の承認を得ながらやっていくじゃないですか。無計画にやりながら、余白たっぷりにやっていこうと言っても否定されて、事業が進まないということが行政のメニューにそのことが現れない原因の1つだと思うんですが、「芝の家」が港区の事業として実施できている……つまり、余白を待ちながら事業ができてるのはなぜなんですか？

**坂倉：**最初から出来ていたわけではないんです。最初の1年は喧嘩ばかりしていました。いま割とい

い感じなのは、ちゃんと関係ができあがってきたからだと思います。やらなければいけないことの中身もお互いわかってきている。それをうまく運営できる仕組みがだんだん見えてきた。

何年もやっていると場に文化が根ざしてくるんです。地域には問題行動を起こしてきた人がいっぱいいて問題はゼロではないんですが、根ざしてきた結果、いろんな人たちが出入りしているなかに「芝の家」らしい人の付き合い方が蓄積されてきているので安定感は増している。こうやればうまくいくというわけではないですが、だんだんと変わっていくたびに、どう調整していくかを重ねていくとだんだん開かれていく感じがあります。

## 行政との連携の仕方

**左京：**行政でこういった後押しをしていこうと思うと、「こういうことをやりました」というアウトプットを評価しながらやっていくことが多いと思うんですが、どちらかというと、アウトカム、あるいはその後のインパクトを行政では評価しているようにみえます。プロセスに関しては行政的には詰める必要があるかなと思いつつも、起こっていること自体を評価できる物差しをつくって、それによって続けられているところもあるのでしょうか？

**坂倉：**そうですね。いろいろなファクターが作用しあっている状況があると思いますが、最初は人間の自発性を信じないとその場の根ざしたものは起こらないです。芝の家でも最初の頃は、事業計画を巡って意見の食い違いがありました。自発的な動きがいつ起こるかはあらかじめ計画することはできませんよね。どのように関係性が育っていくのかを見極めながら、適切な対応をその都度行っていくという進め方を共有することが大事だと思います。

そうした状況をうまくつくり出すために、大学との研究という形にすることも有効でした。まずは3年間「都心部のコミュニティ形成の手法についての研究」をします。この期間中にいろいろトライアンドエラーをして、3年後にだいたいこういう運営をすれば「芝の家」はうまくいくということを報告します、ということです。普通の行政事業はどうしても、ニーズを図りサービスをつくって、完成させてから出しますよね。「芝の家」の場合は行政としても初めての試みで、まずは実際に参加してくれる人が集まらないとどういう運営が適切かわからないから3年は実践する、という試行錯誤ができるようにしました。

アウトカムという点でいうと、報告書でアウトプットだけではなく、その効果についてしっかり説明するを行なっています。仕様書では30頁のところを100頁くらいにして出す。コミュニティができていのかどうかは来場者数だけで測れないことは現場の人たちはみんなわかっていますが、数字で出せるものは全部出さないと議会を通らない。通らなかつたら続けていけないので、来場者数や見学者数、メディア掲載などを全部出して、どういうイベントをやって何人来たというところまでいちいち出します。加えて、大学からの客観的な評価として、「芝の家」のどういうところがいいのか、課題は何かを書いて提出しました。担当の人に読んでもらって、議会の人に何か聞かれたらそれを見て答えるという協力関係をつくっていきました。

**左京：**その点は大学と行政の連携によるメリットなんですね。研究という位置付けで、事業が稼働する前のプロトタイプを3年できたということは、「芝の家」でできたことを港区内の他地域でも活性化事業として横展開するということが、今後の方向性ですか。

**坂倉：**そうですね。現状ではもう一拠点、形態は全然違うんですが、「芝の家」と同じ事業の中で、新橋6丁目にある新築の公共施設の1階のロビースペースを同じように区民の人と運営しています。ただ、事業としては同じですが、こういう小さい場所というのは周辺環境に影響されやすい。「芝の家」の周辺人口はファミリー層などがいますが、新橋6丁目はオフィス街で、住民は相当高齢化が進んでいて人数も少ない。その代わり働いている人はいっぱいいて、2階3階には子育て支援のスペースがあり、そこに子どもを預けてくる人の出入りがあるという場所です。なので、「芝の家」はわりと居場所的ですが、新橋のほうは「ご近所ラボ新橋」(<http://lab.gokinjo-i.jp>)という名前で、いろんな地域の活動を始めていきたい人が気軽に活動のプロタイピングができる場所というかたちで、「みんながやりたいことをやろう」という感じでやっています。



## 体と気持ちがひらく場所にする

**紫牟田：**会場からの質問です。「芝の家」がひらいているときは「誰かがずっといるんですか？」。

**坂倉：**「芝の家」には、毎日お当番の人が2～3人くらいいます。スタッフが1人で有償ボランティアの人2人くらい。掃除をしたりや来た人を迎えたり見守ったりしています。

**紫牟田：**次の質問です。怪しい人が来たときはどうなんですか？

**坂倉：**怪しい人も来るときはあるんですが、それは隙を見せるとくるんです。完全にこっちの問題です。ちゃんとお互いを尊重しあって関わる空間になっているとあんまり変な人は来ない。でも、閉鎖的という意味ではありません。

変な人ではないですが1つ事例を挙げると、一時期「モンスター・ハンター」が近くの児童館で禁止になったことがあって、モン・ハンをするために近くの小学生が「芝の家」に結構来るんです。お当番の人がそれを問題行動だと考えたのは、グループで来て挨拶もそこそこでソファに陣取ってゲームをやっていて、声かけても全然反応がないから「けしからん！」みたいな感じになったんですよ。かわいらしい問題行動なんですけど、なぜこういうことが生まれるかというと、やっぱり“隙”なんです。ちゃんと運営できていて見守る人がいれば、その子たちが最初に来たときに「こんにちは、どこからきたの？」って聞いて、名前をしっかりと聞いて関係をつくらないといけない。

普通に考えても、自分の家に小学生が5人乗り込んできて、急に黙ってゲームを始められたら違和感あるじゃないですか。自分と同じ空間に関わりがない人がいきなり入ってきたら、普通は違和感があるから関わろうとしますよね。それが相手の行動を引き出すのだと思います。隙があると単なる公共施設のロビースペースになってしまう。つまり、「ここにいる権利はあるけれど、私が何をしようが勝手でしょ」という言い方を許してしまうような最初のリアクションだと、「ここは誰にも挨拶しないで、出入り自由でゲームしていても怒られない場所なんだ」となるんですね。2～3回その繰り返しがあると、向こうもそのつもりで来てしまう。そういう子どもの行動を引き出してしまうのはスタッフなんじゃないか、と見立てると、1回そうってしまったのはしょうがないから、「こんにちは」と言っても無視されてもしょうがない。だから何度もガンガン関わるんです。そうすると向こうも変わってくる。自分たちの仲間やゲームに向けてしか働かなかった意識が、だんだん空間全体にいつて、一応あっちにはこういうおじいちゃんがいるけどこっちはお母さんたちがお茶を飲んでいる。という感覚が開いてくる。そうすると、「おやつ出来たから食べる？」って聞くと、ちゃんと「食べる！」という反応が出てくる。そうなれば一緒にいてもあまり違和感がないんですよ。自分のやりたいことをやっても一緒にいられる。結構デリケートですね。

**左京：**実際自分で家をひらこうと思ったときは、「どんな人くるのかな？」「変な人来てしまうのかな？」という不安感がある方が多いと思うんですが、「世田谷区トラストまちづくり」の講座でもいまのようなお話、つまりひらく側の振る舞いである程度防ぐことができるというアドバイスをされていたんですか？ 結構、そこを不安に思う方多いのではないかなと思うのですが……。

**紫牟田：**会場からの質問でもセキュリティの問題や近隣住民との関係をどうやってつくっていくのかという内容が来ています。

**坂倉：**ちゃんと目の前の人と関わっていれば、そんなに変なことは起こらないと思います。慣れは必要ではあるけれど、いくらいろんな人に来て欲しいと思っても、家に最初に誰かが入ってきたときはすごく緊張するじゃないですか。その緊張は来た人にも伝わるから、向こうも緊張しますよね。なんかこう、この居心地の悪さはなんだろう、って思ってしまう。「芝の家」では、朝ちゃんとスタッフミーティングをするようにしていて、連絡事項の他に1人ひとりの気分や体調はどうなのかということをスタッフ同士で共有するんです。元気だったらいいんですけど、「昨日はあまり寝られなくて、あまり体調良くないんだよね」という話をする、「じゃあ、あんまり無理しないでね」とか「午後忙しくて、もしこの作業できるならしたいな」とか気になっていることとか、自分の不安や体調、みたいなことをお互い共有する。「弱さの情報共有」といって、自分の弱みちゃんと開示するというのが全体の強みになっていく。例えば3人の当番の人たちが互いにそういうことを表明すると、互に「いいよいいよ」って優しい関係になっている。人間ってバカじゃないというかセンスが良いから、そのスタッフの関係性がガラガラっと扉を開けたときに確実に伝わるんです。「おはようございま

す」も言わない会社はピリピリしている感じが、誰も何も言っていないのに伝わりますよね。開けた瞬間「これは、いかん！」って（笑）。ここでは下手なこと言ったら責められるのではないかな……なんという雰囲気だと人間はどんどん閉じていってしまうけれど、スタッフがみんな開いていると、「ここはもしかしたら自分が思ってること言ってもいいかな」とか「ちょっと弱みを出してもいいかな」「やりたいことやってもいいかな」って来た人もそういうふうに体つきが開いていく。気持ちと体がひらいている人たちが集まっていると、後から来た人も「ここ、安心できそうだ」って直感的に思うんですね、そういうことを丁寧にやることは大事なと思います。チェックインとチェックアウトというか、それはすべての場をひらく人たちに推奨してますね。

## 場の数だけひらき方もある

**紫牟田：**会場から、「芝の家」や「三田の家」では行政はどの程度どんな内容で変わったのかという質問が多々あります。自分の自宅をひらきたいというときにどんなひらき方をしていったらいいのかというと、最初から空き家を借りて地域にひらいた場所にしたいと言う人と、先生のように家賃をシェアしてしまおうというところもある。三田の家のように残したいからなんとかしたいという場合もあるでしょう。ひらき方にはさまざまなバリエーションがあって、自分にあったかたちを選べるんじゃないかなという気がしました。

世田谷区にある「岡さんの家」は、持ち主の方がずっと住んでいるわけではなく、ボランティアの方が運営されているそうです。ひらくかたちの違いと運営の違いは関係がありそうな気がします。左京さんは「岡さんの家」に行かれてどんな感じでしたか？

**左京：**いろいろ気づきはありました。夕方に行ったので閉じかけていたんですが、入れ替わり立ち替わり人が来ていていました。未就学児の子ども持ちのお母さんが来て、運営しているおばあちゃんおじいちゃんと話をしている姿とか、近所の養護施設と連携したキッチンがあってそのキッチンを使ってごはんを食べる企画を立てたりしていました。また、ピアノがあるんですが5、6年生の男の子がパッと入ってきて、いきなりピアノを弾き始めて、弾き終えたら「じゃっ！」って帰って行ったんです。「今のは何なんだったんですか？」ってちょっとあつけにとられましたが、本当に多世代の人が多目的にそこを利用している様子は面白いなと思いました。

それから、素朴な気づきですが、運営をされておられる見守り隊の方々とはつきりご近所の方だと思ったんですが、実は世田谷区外、千葉からいらしてたんです。このような遊休資産を活用するとき、このように外から人が入って、そこを受け皿に地域コミュニティをつくるというようなことが起こってくるんだと思いましたね。ホワイトボードにはいろいろな人がイベントなどの予定を書き込んでいます。

かわいいイラストのパンフレットなどもボランティアで運営をされている方ご自身が描いてらっしゃってました。

**紫牟田：**「世田谷まちづくりトラスト」による地域共生のいえは現在21軒あるそうですね。

**左京：**「世田谷まちづくりトラスト」は世田谷区の外郭団体で、ノウハウ提供や助成メニューを提供してこの仕組みを支援しているそうですが、「地域共生のいえ」の運営主体は「世田谷まちづくりトラスト」の場合もあれば、地域のNPOやオーナー自身など、いろんな運営主体はあるようですね。地域共生のいいところは市民が自分たちのリソースを提供して自分たちの労力を提供しながら地域のためにやることだと思います。これから人が減っていつて税収が厳しくなる中でも地域活性化をやろうとすると、いかに市民が自分たちの力で地域コミュニティを運営していくかという状況をつくり出していくかが非常に重要ではないかと思うと、「地域共生のいえ」のアプローチは優れていると思います。逆に港区のように行政が事業を主体としてやっていく良さはどういうところにありますか？

**坂倉：**民間か行政かということですが、自治体によって行政が支援すべきポイントが少しずつ違うと思っています。

港区の場合とはとにかく賃料が高いんです。日本の土地の使い方、建物の床の使い方というのは、ほぼすべて、いくらで借りていくらで儲けるか、なんですよ。ところが港区では床が高すぎるので、民間であまりお金を払わないで済むようなビジネスモデルをつくるのは相当大変なんです。そういうと



ころでは空間を確保するコストを行政が負担することが正しいかもしれない。

逆に世田谷は、民間の土地を活用していこうということなので、空き家の場合は大家さんは安くてもいいからちょっと家賃が欲しい。逆に空き家の事業を何年かやってきて分かったのは空き家を持っている人と、使いたい人のマッチングがすごく難しく、ノウハウが必要ということ。トラまち（世田谷トラストまちづくり）の人たちが5年くらい試行錯誤しながらだんだんわかってきました。そこが提供できる価値なんです。お金は必要だったら助成するけど、お金の部分はいろんな制度で借りられたりするのでお金が一番必要ではなくて、大家さんとマッチングして、借りるにあたってどういう建築の法規的問題があるのか契約上どういう問題があるのか、活動がうまくいくためにはどう世田谷の他のリソースと結びつけてあげるのか、そこが1番大事だということが分かってきました。現在は単年度の事業で、空き家と活動団体のマッチング、審査と改装を行なっているのですが、スケジュール的には2年度にまたがって伴走できると、さらに質の高いコーディネイトができそうです。でも、それは港区じゃ成立しないんです。空き家がないし、貸してくれる人もいないから。だから、自治体によって何をどう支援するのが1番いいのかは少しづつ違うのだと思います。

**左京：**渋谷区でもそういった場所がもっとたくさんあればいいなと思います。渋谷区は500~600のNPOが活動してるんですが、場所に困っている人は少なくないと思います。もちろん法人ではない活動の人たちにとっても、公共施設では使用時間や、登録できる団体に住民が何割いなければならないなどという制約があってそれほど使い勝手がいいわけではない。なので、先にご紹介いただいたような、余白がある気持ちのいい場所を自宅の一部でもいいからひらこうと思っている人たちとそういう活動がマッチングされていくのはすごく良いアイデアだなと思います。港区と渋谷区は近い状況でもあるのかなと思うんですが、渋谷区でこういう場をできうる状況があるとする、どう起こりえますかね。

**坂倉：**想像でしかないですが、実は結構あるんじゃないんですかね。事情がわからないので、どう支援するかは思いつきませんが、人材が豊富すぎると繋がらないということがたまにあるんですよ。要は渋谷はいろんな人がいて、職や趣味など、同じ関心を持つ人がたくさん実はいて、そうすると気の合う人だけであっても相当の人数になりますよね。そうすると、そういう団体がたくさんあるんですが、かえって、異質な業種と出会わない。これが人口5000人くらいになるとデザイナーであろうと農家であろうと、人数少ないからすぐ会いますよね。人材が豊かすぎて、難しさがあるような気がします。渋谷区と港区は人口が同じくらいですよ。渋谷の全体像はわかりませんが、渋谷の駅の周辺と住宅街があるところなど、それぞれ状況はだいぶ違うと思いますね。

## 人生が変わる

**紫牟田：**そもそもコミュニティというのは何なのかをということを考え直したいという質問もあります。どうやったらひらいていくかという話がコミュニティの繋がりをつくることとに関連させながらお話されたと思いますが、コミュニティ形成みたいなものを意識しながらひらく、ということがひらく側には必要な意識なのでしょうか。

**坂倉：**地域政策的にあったらいいなものはもちろんあるんですが、個人でやるなら自分が会いたい人に会えるかを考えてやっていけばいいじゃないでしょうか。いろんな形態があると思います。近所の人と仲良くなりたいという場合もありますし、とくに渋谷は相当住んでない人たくさん出入りしてると思うので、そういう人も含めて、自分が本当に会いたい人、一緒にいて楽しい人、必要な人に会えるというのをつくるといっていいと思います。

**左京：**坂倉先生のことを知ったのは、世田谷区の講座にお出になられた方とお会いしたことがきっかけなんです。その女性は、講座に出て、実際に自分でもやってみようとして渋谷区代々木上原の自宅のガレージを改装して、週に3日だけひらいて活動しているんですよ。代々木上原なので「うえはらんど」という名前です。先ほどのお話とは逆に、家をひらいた結果、良かったこと、起こったことはありますか。この方はたまたま先生の講座に出られた方同士がまた集まってきていて、活動の継続の場になっていました。うえはらんどは住宅地の坂道の途中にあるんですが、坂を登る途中で腰を下ろす場所になっていたり、井戸端会議的なものが起きたり、習い事の帰りに寄ったりしていて、ひらかれた

方は、「この場がなかったらこういうことは起こらなかった」とおっしゃっていました。

**坂倉：**私もそうだし、いろんな方々を見ていて思うのは、家をひらくと元気になります。運営が大変で疲れることはありますが、割と元気になると思います。人生が変わります。元気になるのはオープンになるからだと思います。

都市生活のなかでは、「こうじゃないとダメ」「わたしはきつこう！」「こうでしかダメ」「わたしはきつとこれしかできない」「これができないと仕事ができたとはいえない」というような、“ねばならない”ものに囲まれて生活してしまうことが多いと思うんです。だけど、場をひらくと自分の計画通りにならないことが結構あるし、実際知らない人と関わって自分が自然とオープンにならないと関われないと思います。自分が来て欲しい人ばかりが来るわけではないし、いろんな人が来て欲しいと思いつながり、選別してしまうことがある。そうすると、自分の心が閉じていることがわかってきて、そんなに頑張らなくてもいいかなとか、他人と自分は違うことちゃんと理解して、こういう行動をして欲しいと思いつぎている自分が起こしている現象、こういうことが起こったら嫌だなと恐れてるからかえって引き出してしまうことなどが、たくさんの人と会ったり話すことでほぐれて元気になってくることはあります。人生が変わると思います。「人生が変わらない場づくりなんかは意味ない」と思っていますね。いろんな人と一緒にいる場所をつくることは、人生の時間の何割かをそこで過ごすわけじゃないですか。そこでやらない限り絶対会わない人と結構本気で一緒にいることは、それをやる以前にわたしがいた周りのネットワークとは全然違う人と人生を歩み始めるわけです。そうすると、起こることも変わるし出会う人も変わるし、価値観も揺さぶられるし、どんどん変わっていくと思う。だから、それが起こらない小手先で「みなさんこんなの好きなんですよ」みたいな自分が全然動かないような、場づくりにはあまり心が動かされない。物理的な意味では家は簡単にひらくことができますが、目に見えないところでもっと豊かでいろんな変化が起こります。人生が変わる要因は自分の努力というよりも、どんな人と出会うかが大きい。それまで会わなかった人と会うようになると自然に変わっていきますから、その意味でその方の人生は格段に広がってるいくんじゃないかな。

## やってみれば変わる

**左京：**その方がおっしゃってたんですが、最初のご家族の大反対にあったそうです。挑戦したくても安全面や近所の目を気にしてる方は多いと思います。そういう方に一歩前に踏み出して欲しいときはどうアドバイスされますか。

**坂倉：**やったらいいんじゃないですか（笑）。活動したい人に琵琶湖の「鳥人間コンテスト」を例に出して話すことがあります。恐れがあると飛べない。また、踏み出せない人は、しっかり計画を練りたいタイプです。完全に事業計画が立たないとできない。助走距離が10mしかない鳥人間コンテストは普通に考えると飛べないんです。でも、とにかく飛び出しちゃったら何か変わりますよ。鳥人間コンテストの飛行機が何キロも飛べるのは、飛び出しちゃうからなんです。その結果何が起こるかという、落ちます。落ちるんですけど、落ちている間に得るものがあるんです。加速度なんです。速度があると揚力を得られて、最初飛び出して落ちると揚力がつくからどこかで“浮く”という感覚がある。わからないけど、とにかくやってみると、たくさんのがフィードバックで得られる。それはやる前には全然わからないんです。フィードバックされて「これだ！」と思ったり、応援する人ができたり、事前に「こういう場が良いな」と思ったけれど、「本当にやりたい場所はそうじゃなくてこれだった！」みたいな、変わることを恐れずプロセスのなかで自分らしくある場をつくっていくのが大事ですね。でも、家族が自己実現のハードルになるというのはよくあることで、ご家族の理解はすごく大事だと思います。

**左京：**人生の歩み方の話だなと聞いていました。先生の最初の方のスライドの話をもう少し聞きたいんですが、人と人の「ほど良い繋がり」というニュアンスがすごく大切なところだと感じます。なぜ場に人が集まるのか、集まった人が何故その場で生き生きしはじめるのか……もう少し解像度高めたいですね。

**紫牟田：**先生は最初自分のためにひらいたらどうかとも言っていましたよね。自分のためにひらいたけれど、人のためにもなった……そんな感じなのではないでしょうか。

**左京：**確かに「地域」と言ってしまうと地域のためというところが印象に残ってしましますが、それは本人のためということと良い関係にあるということですね。

**紫牟田：**「ほど良い繋がり」をつくろうということを目指してつくるのかどうか。それは「家をひらく」ことを考えたときに微妙な感じ方なんです。例えば、自分の家をひらこうと思うとき、「どうひらくか」と考えてしまうと思うんです。玄関先かな、家に上がってもらうのは嫌かな、だったら玄関先改装したほうがいいのかな。計画をつくらないと進めない人がいるとおっしゃってたけど、やはり、何が自分のリソースになっているのか、何を提供できるのかと考えてしまうとひらきににくくなってしまっているのではないかなと思うんです。

**坂倉：**「家をひらく」というのは、改めて考えると深くて広い言葉ですね。いろんな議論が湧いてくる面白い言葉だと思いました。家をひらいた事例を聞くのはいいけれど、では自分で「ひらこう」とすると急にハードルが上がるような気がしてきました。「家をひらく」という言葉に抽象度が高くなってしまうと、何をしたいか分からなくなって、急に地域の誰かが家に入ってくれないといけないのか、と勝手にハードルあげてしまう気がします。家にどういう状況をつくりたいのかを考えると、必ずしも家をひらかなくてもいいかもしれない。「家をひらく」という言葉とは違うものが発明されるのではないのでしょうか。

**紫牟田：**続け方にはコツがあるんですか。

**坂倉：**一般論かもしれませんが無理をしないことです。無理はしないつもりでも無理していることが多い。「こんなのだと来た人が満足しないんじゃないか」「私のつくる場はこんなにダサくないとか」「今日は3時からオープンと言ったのに、30分遅れたらすごいいけないことだ」と思ったりしてしまうことがあるんですが、勝手に開いているだけだからそんなことはないんですよ。「遅れた」という出来事が起こっただけ。あまり無理しないで、続けられることが大原則として大事な気がします。

**紫牟田：**やめてもいいんだという勢いでもいいんですね。

**坂倉：**やめたらいいと思いますよ。

**紫牟田：**そうですね。でも、「1回ひらいたのに閉めちゃった私って本当にダメな人間！」みたいに思いがちですね。

**坂倉：**なんでなんででしょうねえ。なぜみんな、始めたことを途中でやめることを「あつてはならないことが起こった」というように反応するのがよくわからない。「三田の家」でもそういうことがありました。「三田の家」ではしっかり時間をとってメンバーの想いを分かち合う時間をとっていました。大家さんが亡くなる前の秋にも、ちょうどオープンして6年経った頃でしたが、清里で合宿して、「三田の家」をこれからどうしようか、という話を1泊2日でやりました。そのときに最初から関わっているメンバーはそこそこ満足したということでしたが、途中から合流した人たちはまだまだやりたいという話だったので「じゃあ、10年ぐらいはやるかね」と言っていたんですね。それが大家さんが亡くなってもう今年で終わりだとなったので、我々は潮時だろうと納得していました。やるべきことをやったからわざわざ「三田の家」を買い取ったりする必要はないねって言って閉めようと考えていたんです。でも、よく来る人たちは「大変だ！三田の家を存続させるために活動するぞ！」という話になったんです。それはありがたいことですし、自分たちに必要だから続けるということもあったんですが、なんとなくそういう話につきまとう「なくなるのは悪いこと」ということを感じました。日本にある家制度、家は継いでいかなければならない、家を取り潰されることはあつてはならないことで倫理にもとるというところがある。その考え方が物語や制度のなかで刷り込まれ過ぎていて、何かが途絶えることにすぐ拒否反応があるなとそのとき思いました。

**紫牟田：**一方で、地域の中でなくしてはいけないと思っているものを環境整備するみたいな意味で考えたときに「あそこはなくせない」だから「あの家をひらいておいたほうがいい」みたいな考え方も一方であるのではないのでしょうか。運営する側からはやめてしまってもいいけれど、資源として残すべき家みたいなものはオープンでコモンな場所にする。それは必ずしもオフィシャルではなくていい。市民はいつでもやめてもいい、というような態度で家をひらくことを考えるということもあるのではないのでしょうか。

**坂倉：**「全体最適」が保たれるといいですね。エリア的マネジメントはニーズがあるから続いているわけですから、本当に必要とされているものがなくならないようにしていくことが大事なんです



が、その頑張りを一定の個人の善意に委ねていると続かないですね。たくさんの市民活動のなかでニーズがあれば、誰かそれをやろうと思える人に委ねてしまっていることがあるかもしれませんね。

**質問者A：**行政はある程度の期間になると担当が交代されることが多いのですが、そうするとまた最初からガチンコになってしまいますか。

**坂倉：**そういう話は聞きますが、幸い「芝の家」の事業の場合はいろんな状況があって逆でした。一番最初の担当の人ほどこだわりがあって、双方の意見を理解し合うのが難しかった。1年経ってだんだん馴染んできて、2年経って他の地域にも注目されると、次の担当の人はちゃんと現場の判断や意見を尊重してくれようになった。スタッフの力もついてきたので、現場に任される量が増えてきました。初年度は毎週ミーティングやっていましたが、いまは月に1～1.5回くらいになりました。やろうと思っていることを話すスムーズに対応してくれるようになってきています。

**質問者A：**実は、最初に逆戻りになりそうなんです。これは働きかけているほうのパワー不足ということでしょうか。

**坂倉：**そんなことはないと思います。「芝の家」は行政側もかなり手探りな事業でした。普通、行政が仕様書を出して契約するんですが、行政が仕様書だけ渡して、後は事業者が1回会って最終チェックだけするということがあれば、割と行政の人が自らコミットして動かす事業もある。どちらかですね。「芝の家」は行政の人が意思決定に参加して現場スタッフにとって初めてのことをどうやろうかを一生懸命に考えるという関係でした。そこがうまくいったそもそもの要因だと思います。

**左京：**行政の方はいろんな団体との繋がりが濃くなりすぎて馴れ合いにならないようにローテーションしている側面があると思うんですが、結局、地域にとっての事業の意味や価値をきちんと説明できるような準備をして、働きかけの迫力ではなく、価値を誰にでも説明できるようにすると良いかもしれないですね。研究者や大学の方に力を借りながら、定量的にも定性的にもコミュニケーションできるようにしておくということが大事なのではないかなと思います。それが重くなると新しい人は周りに説明できずに、それを続くにくくなってしまうことも逆にあつたりするのかなと思います。そういうことを、僕らも普段の活動で心がけています。

**紫牟田：**「世田谷トラストまちづくり大学」では、「家・建物の利活用に継承に意欲のある土地・建物・所有者」を対象としていると書いてありますね。

**坂倉：**世田谷区では大家さんを発掘したり、活用団体をマッチングさせる工夫を始めています。空き家事業でも、関心のある人を集めて現場見学会をやったり、例えばここをどうやって活用するか、みたいなテーマをグループで話し合いアイデアを出したりそういうこともして、緩やかに結びつけて可能性を探っていきます。そのなかから、この大家さんとこの団体がマッチングするとしたらどういう風につくっていくかを考えるようになってきていますね。

**紫牟田：**シブヤ大学では、そういう空き家見学ツアーは授業などであるんですか？

**左京：**ないんですよ。空き家があるかもわからないです。オーナーさん側の発掘事業をやったほうがいいんでしょうね。もし、そういった方いらっしゃれば、そこをコミュニティのために利活用したいというひとはたくさんいると思いますので、働きかけていきたいと思います。

ところで、坂倉先生に冒頭で話されたことをもう一度うかがいたいのですが、先日、イタリアのトリノに、「地区の家」という市民で運営している公民館みたいなプロジェクトを見に行きました。いまアフリカからの移民が多く、移民の方々もまちのコミュニティの中の輪に入って、地域コミュニティの関係性を修復するとか、貧困な人たちをどう援助するかというような、明らかな課題がそこにはありました。

先程、冒頭のほうでおっしゃられたのは、昔は地域コミュニティのなかで自分が担ってたことや、誰かとの関わりのなかで生きていたけれども、それがサービス化されることで、一人で生きられている時代が来てしまったとおっしゃっていましたね。そこでなんらかの課題が生じたことで、次の場を必要としていたとお話されましたけど、現在の我々の課題は移民の問題のようにわかりやすいような気がしていて、我々自身も、それがいったいなにが課題なのか、何が生きづらさの要因なのか、なぜそういう場に行く和我々が生き生きと出来るのか、ということが分からないまま無意識的にそういうものが求められて来ているような気がするんです。いまそういった、人が生き生きできる場自体が増えてきている気がするし、そこでいったい何が起きているのか、駆け足で説明して下さったこと

ですが、もう一度そこに立ち戻って、最後お話をうかがいたいと思います。

**坂倉：**人と人がちゃんと尊重しあって一緒に居られる空間がどんどん増えていかなければならないと思います。日本の課題というのは顕在化したものはないと言われていますが、うっすらとした断絶みたいなものがそこらじゅうに広がっていて、友達じゃない人は他人、駅で倒れている人がいても見て見ぬ振りをするのが当たり前……それはかなり病的なことのように見えるんです。それが引き起こしている、例えばドメスティックバイオレンス（DV）や自殺、元気に会社にいけないなどといった問題は結構たくさんある。「繋がる」という言葉で言うと、みなさん一人ひとり自分と繋がっているんだろうか。自分自身にちゃんとオープンな態度で接しているんだろうか。「自分の感情や体調と一緒にいますか？」という問いかけから始まって、「本当に他者とちゃんと丁寧に関わることやってますか？」「地域と関わってますか？」「自分の人生と本当に関わっていますか？」「人生に対して、地域に対して、他者に対して、自分に対して、本当にオープンな私たちで『これを本当にやりたいんだ！』『これはやりたくないんだ！』ということをやちゃんとできてますか？」。

それを表面的に誤魔化したり、他人の目を気にして合わせたりをし合っている。それはすごく息苦しいことで、すぐに起こっていつてしまうことだと思うんです。「家をひらく」、つまり小さい公共の場をつくるというのは、そういうことではない。みんな一緒じゃなくちゃいけないとか人の目を気にしてどうしようとかではなく、自分はいまここにちゃんと自分として存在している、という実感を他者とともに確かめられるような場所を本当に求めているんだと思うんですね。だから、家の中にずっといたらまずいと思ってるんです。だけど、公共施設に行っても求めているものはないと思う。自分の家をひらくことから始める人もいれば空いてる家を違う使い方で使おうという人もいる。それは、商業の場所、仕事の場所ではない場所であり、いろんな人が居られる場所で。こういう場をつくらうという意味は、私たちの生存本能なんじゃないかなと感じています。

**左京：**ありがとうございます。何故いま広がってきているのかという背景が気になっていたので、いまのお話で腑に落ちました。

**紫牟田：**そろそろ時間になりました。「家をひらく」とは、先生のおっしゃる「人と人との程よい関係を生み出すことで幸せな社会をつくる方法」の一つとして、小さな公共の場をひらくという取り組みなんだということが、とてもよくわかりました。また、小さい公共の場所はいまとても必要な場所で、それはコミュニティをつくるという大義名分ではないということも再確認できた気がします。坂倉先生、最後に一言お願いいたします。

**坂倉：**改めて「家をひらく」ことの多様性と深さを感じます。「家ひらくと楽しいよ！」「仲良しグループじゃないところにひらかれる場所がいっぱいある」という機運がもっと高まってくれるといいなと思いました。本当にありがとうございました。

**紫牟田：**ありがとうございました。